愛知淑徳大学論集　―心理学部篇―　第13号　2023　109－119

感覚処理感受性が自己抑制型行動特性に与える影響

― 親からの期待に影響されやすい中学生を対象として ―

鈴 木 百 香

要旨

本研究では，感覚処理感受性が自己抑制型行動特性に与える影響について，親からの期待に影響されやすい中学生を対象として検討を行った。感覚処理感受性が高い中学生をHSC（Highly Sensitive Children）とし，HSCは親からの期待に敏感に反応し，自己抑制型行動特性を身に付けやすいという仮説を立てた。因子分析の結果，期待は重荷と励みから構成された。偏相関分析の結果，重荷得点と自己抑制型行動特性得点の間に見られた正の単相関が，HSC得点を統制すると無相関になったことより，HSCは親からの期待を重荷として敏感に察知し，自己抑制型行動特性を身に付けやすいことが示唆された。一方で，励み得点と自己抑制型行動特性得点に見られなかった単相関が，HSC得点を統制することで正の相関が見られたことより，HSCは期待を励みとして敏感に察知し，自己抑制型行動特性を身に付けるという仮説は支持されなかった。以上より，仮説は部分的に支持された。本研究の結果をもとに，HSCのセルフモニタリング，学校での支援について考察を行った。

キー・ワード：感覚処理感受性，自己抑制型行動特性，親からの期待，中学生

問題と目的

文部科学省の調査によると，不登校生徒は増加傾向である（文部科学省，2021）。近年，不登校の原因として，Highly Sensitive Person（以下，HSP）が注目されている。HSPは，脳内で感覚情報を処理する過程における生得的な個人差を示すSensory Processing Sensitivity（感覚処理感受性：以下，SPS）が高い人を指し，人口の15～20％程度存在する（Aron & Aron，1997 冨田訳，2000）。HSPは，些細な変化や他者の感情に反応しやすく，生得的に傷つきやすい特性（苑田，2014），悩みやすく自信を持ちにくい特性（赤城・中村，2017）を持つ。このように，HSPはSPSが高いが故に生きにくさを感じているとされている。鈴木・菊島（2019）は，HSPは多くの刺激に敏感に反応しストレスを感じやすいため，不登校傾向が高いことを明らかにした。また，串崎（2018）は，HSPは感受性の高さが原因となり，周囲からの誤解を受けやすく，過剰適応した結果，ストレスが溜まり，不登校になりやすいことを示した。本研究では，不登校につながる要因の１つとして自己抑制型行動特性を取り上げる。自己抑制型行動特性について系統的な研究を行っている宗像（1997，p.16）は，自己抑制型行動特性を「周りの人との関係の中で，自分の肩を持ってくれる人に気に入られようとして，自分の感情を抑えてでもその人の期待に応えようとする」行動特性であり，「良い子特性」と捉えている。自己抑制型行動特性を身に付けた人は自我の心理社会的発達段階において，「信頼性」，「自律性」，「自主性」，「勤勉性」，「アイデンティティ」，「親密性」，「統合性」の達成度が低いこと（菊池・岡本，2008）や，ストレス耐性が低いこと（上田・窪田・橋本・宗像，2012）が明らかになっている。以上のように先行研究では自己抑制型行動特性の負の側面が強調されている。このことから，自己抑制型行動特性を身に付ける前に，適切に働きかけを行う必要性が大きいと言える。

しかし，HSPであることは外見から分かりに

くく，本人も自覚していないことが多い。そのため，周囲の大人が生来的な能力（本研究においては，SPSが高いこと）を感知し把握することが必要である（平野，2012）。本研究において，HSPが自己抑制型行動特性を身に付けやすいことが明らかになり，その理解が伝播されれば，HSPを早期に支援することの重要性が示され，不登校になる前の支援に変化が生じうるだろう。

本研究では，HSPが自己抑制型行動特性を身に付けないような関わり方（環境要因）として，親からの期待を取り上げる。柏木（1990）は，親の期待が子どもを取り巻く環境を作り，子どもの発達に影響を与えると述べている。また，子安・郷式（2007）は，親と教師からの期待を比較し，親からの期待は日常的に接する親子関係の中で生じる自然な感情をベースにしており，子どもに及ぼす影響はより大きいことを示唆している。このように，親は子どもと日常生活で関わる機会が最も多く，子どものパーソナリティを発達させる際に大きな影響を与える存在である。少子化が進んでいる現代において，子ども一人にかけられる期待の割合が大きくなることが予想される。さらに現代は，祖父母に助けを求めることができない核家族や，一対一の関係性から期待が強くかかりやすく逃げ場がないひとり親家庭が増加している。このような状況において，子どもの気質にあった期待のかけ方が重要になってくる。

春日・宇都宮・サトウ（2014）は，子どもは親からの過度な期待を認知すると，自己抑制型行動特性を発達させることを明らかにしつつ，このメカニズムには子どもの気質や親子関係などの要因も関わっていると推測している。また，水野（2010）は，子どもが新規の人に対して積極的な気質であると，母親はリーダーシップや自己主張的な行動を期待し，子どもはその期待の影響を受けて自己主張的行動特性を発達させることを明らかにした。以上より，行動特性の発達には，親からの期待や子どもの気質が関わっていると言える。しかし，どのような気質が自己抑制型行動特性を引き起こしやすいのかは明らかとなっていない。そこで本研究では，SPSが高いという気質に着目する。「HSPは，親からの期待に敏感に反応し，自己抑制型行動特性を身に付けやすい」という仮説を立て，HSPが自己抑制型行動特性を身に付けるメカニズムを明らかにすることを目的とする。

思春期は自己に注目を集め，親からの影響を多大に受ける時期であること（石津・安保，2008）と，中学生は親からの影響を受けながら主張性が増すと考えられ，最も親からの期待との葛藤が強く意識される時期であること（渡部・新井・濱口，2012）から，本研究では中学生を調査対象とする。また，SPSの高い中学生のことをHighly Sensitive Children（以下，HSC）と呼ぶこととする。

方　法

調査対象者

愛知県の公立中学校に通う生徒170名（男子88名，女子82名，M＝12.6歳，SD＝0.64）に質問紙調査を行った。

手続き

調査に当たり，事前に協力校の校長，教頭に質問紙の主旨と内容について承諾を頂いた。授業時間（学級活動）を使って学級ごとに質問紙を一斉配布し，その場で回答を求めた。回答は任意であること，授業評価とは関係がないこと，途中で回答を中止できること，匿名性があることを，調査実施前に担任から生徒に説明することを依頼した。また，同様の旨を質問紙の表紙にも記載した。

質問紙

質問紙はHSCS-A（日本語版青年前期用敏感性尺度 Japanese version of Highly Sensitive Child Scale for Adolescence；岐部・平野，2019），自己抑制型行動特性尺度（宗像，1997），親からの期待に対する評価尺度（春日・宇都宮，2011）から構成された。質問紙内の漢字にはすべてふりがなを付けた。また，日常的に配布される学校の資料の特性に合わせるため，評定は左側に当てはまる程度が高いもの，右側に当てはまらない程度が高いものを配置した。

HSC　HSCS-A（岐部・平野，2019）を用いた。

内容は，「騒音のせいで不快な感じになる」や「生活に変化があるのは好きではない」などの11項目であった。「1．まったく当てはまらない」「2．少し当てはまる」「3．どちらでもない」「4．あまり当てはまらない」「5．とてもよく当てはまる」の5件法で回答を求めた。

自己抑制型行動特性　自己抑制型行動特性尺度（宗像，1997）を用いた。内容は，「人から気に入られたいと思う」や「自分らしさがないような気がする」などの10項目であった。「0．そうではない」「1．まあそうである」「2．いつもそうである」の3件法で回答を求めた。

親からの期待に対する評価　親からの期待に対する評価尺度（春日・宇都宮，2011）を用いた。内容は，「期待されてつらい」や「期待されることでやる気が出る」などの19項目であった。「1．いいえ」「2．どちらかと言えば，はい」「3．どちらでもない」「4．どちらかと言えば，いいえ」「5．はい」の5件法で回答を求めた。なお，想起する親を「お母さん・お父さん・両親・その他」の中から選択する形式をとり，その人からの期待を想定して回答を求めた。

フェイスシート　性別と年齢を尋ねた。

結　　果

因子分析

HSC　SPSを測定するHSCS-Aは研究によって因子構造が異なり（髙橋，2016；岐部・平野，2019），本研究では1因子を想定し，主成分分析（最小2乗法）を行った。成分負荷量が.40以上となるように4項目を削除し，項目2，4，6，7，8，10，11を採用した（Table 1）。α係数を算出したところ，α＝.712であった。採用項目の項目得点の合計をHSC得点とした。

自己抑制型行動特性　宗像（1997）に倣い，1因子を想定し，主成分分析（最小2乗法）を行った。すべての項目で成分負荷量.40以上となり，

Table 1
HSCS-Aについての主成分分析（最小2乗法）

		成分負荷量
7.	一度に色々なことが起こっていると不愉快になる。	.809
2.	騒音のせいで不快な感じになる。	.676
6.	一度にあまり多くのことをさせられるとイライラする。	.655
8.	生活に変化があるのは好きではない。	.641
4.	短時間に多くのことをしなければならないと緊張してしまう。	.547
11.	誰かに観察されていると緊張してしまい，普段よりうまくできなくなってしまうことがある。	.524
10.	大きな音は好きではない。	.458

Table 2
自己抑制型行動特性尺度についての主成分分析（最小2乗法）

		成分負荷量
2.	思っていることを安易に口に出せない。	.666
4.	つらいことがあっても我慢するほうである。	.658
3.	人の顔色や言動が気になるほうである。	.651
9.	人を批判するのは悪いと感じるほうである。	.563
6.	人の期待に沿うように努力するほうである。	.542
10.	自分にとって重要な人には自分のことを分かって欲しいと思う。	.539
1.	自分の感情を抑えてしまうほうである。	.519
5.	人から気に入られたいと思う。	.517
7.	自分の考えを通そうとするほうではない。	.419
8.	自分らしさがないような気がする。	.404

１因子性を確認できた（Table 2）。α係数を算出したところ，α＝.744であった。尺度全体の項目得点の合計を自己抑制型行動特性得点とした。

親からの期待　春日・宇都宮（2011）は２因子であるため，２因子固定で因子分析（最小２乗法・プロマックス回転）を行った（Table 3）。春日・宇都宮（2011）に従い，第１因子を「重荷」，第２因子を「励み」とした。回転前の累積寄与率は56.36％であった。α係数を算出したところ，「重荷」はα＝.916，「励み」はα＝.888であり，内的整合性は高かった。尺度全体ではα＝.918であった。各下位尺度の項目得点の合計を重荷得点，励み得点とした。

HSC，重荷，自己抑制型行動特性の関連

HSCと重荷，自己抑制型行動特性の関連を明らかにするため，相関分析及び，偏相関分析を行った。相関分析において，HSC得点と自己抑制型

Table 3
親からの期待についての因子分析（最小２乗法・プロマックス回転）

No.	項目	第1因子	第2因子
第1因子：重荷　α＝.916			
6.	親に自分の何が分かるのかと思った。	**.829**	-.068
11.	期待されることに疲れた。	**.813**	.099
5.	自分に口出ししないで欲しいと思った。	**.805**	-.202
13.	放っておいてほしいと思った。	**.795**	.054
7.	期待を重荷だと感じた。	**.754**	-.001
2.	期待されてつらかった。	**.733**	-.007
12.	親を見返してやろうと思った。	**.704**	-.371
17.	そんな事言われなくても分かっていると思った。	**.653**	.076
16.	期待する親に対して悪い印象を持った。	**.621**	.273
3.	期待されることでやる気を失った。	**.617**	.214
18.	結果を出せなかったらどうしようと不安だった。	**.534**	-.379
15.	期待されることを嫌だと感じた。	**.520**	.394
第2因子：励み　α＝.888			
8.	期待に応えられるよう，頑張ろうと思った。	-.140	**.849**
9.	期待されて励みに感じた。	.077	**.835**
4.	期待されて嬉しいと感じた。	.003	**.808**
14.	期待されることでやる気が出た。	.095	**.799**
19.	期待されることで背中を押されるように思った。	-.255	**.746**
10.	期待する親に感謝している。	.181	**.744**
1.	期待を裏切ってはいけないと感じた。	-.275	**.514**
	因子間相関　因子2	.498	

Table 4
自己抑制型行動特性を従属変数とする重回帰分析

	偏回帰係数	標準誤差	95％信頼区間 下限	95％信頼区間 上限	標準偏回帰係数
HSC得点	.236 ***	.061	.115	.357	.298 ***
重荷得点	.085 **	.029	.028	.143	.248 **
励み得点	.185 ***	.047	.092	.277	.301 ***
R^2 = .222					
$Adj.\ R^2$ = .208					

*** p < .001，** p < .05

行動特性得点には有意な弱い正の相関（r=.371, p<.001），HSC得点と重荷得点に有意な中程度の正の相関（r=.446, p<.001），重荷得点と自己抑制型行動特性得点に有意な弱い正の相関（r=.259, p<.001）が見られた。偏相関分析において，重荷得点を統制すると，HSC得点と自己抑制型行動特性得点に有意な弱い正の相関（r=.301, p<.001），自己抑制型行動特性得点を統制すると，HSC得点と重荷得点に有意な弱い正の相関（r=.392, p<.001）が見られた。HSC得点を統制すると，重荷得点と自己抑制型行動特性得点に有意な相関は見られなかった（r=.103, *ns*）。以上より，重荷得点と自己抑制型行動特性得点の間に見られた正の単相関が，HSC得点を統制すると，無相関になることが明らかとなった（Figure 1）。

HSC，励み，自己抑制型行動特性の関連

HSCと励み，自己抑制型行動特性の関連を明らかにするため，相関分析及び，偏相関分析を行った。相関分析において，HSC得点と自己抑制型行動特性得点に有意な弱い正の相関が見られた（r=.371, p<.001）。HSC得点と励み得点に有意な相関は見られなかった（r=-.118, *ns*）。励み得点と自己抑制型行動特性得点には有意な相関が見られなかった（r=.150, *ns*）。偏相関分析において，励み得点を統制すると，HSC得点と自己抑制型行動特性得点に有意な弱い正の相関が見られた（r=.400, p<.001）。自己抑制型行動特性得点を統制すると，HSC得点と励み得点に有意な相関は見られなかった（r=-.194, *ns*）。HSC得点を統制すると，励み得点と自己抑制型行動特性得点に有意な弱い正の相関が見られた（r=.222,

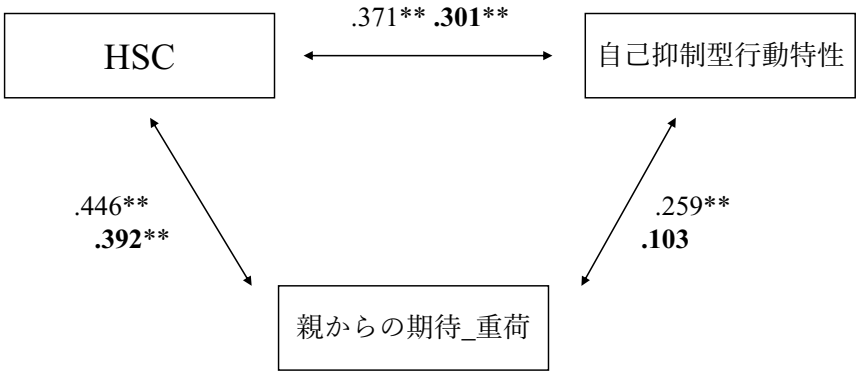

Figure 1. HSC，自己抑制型行動特性，重荷の関係。
※数字は相関係数，**偏相関係数**の順序で示す。

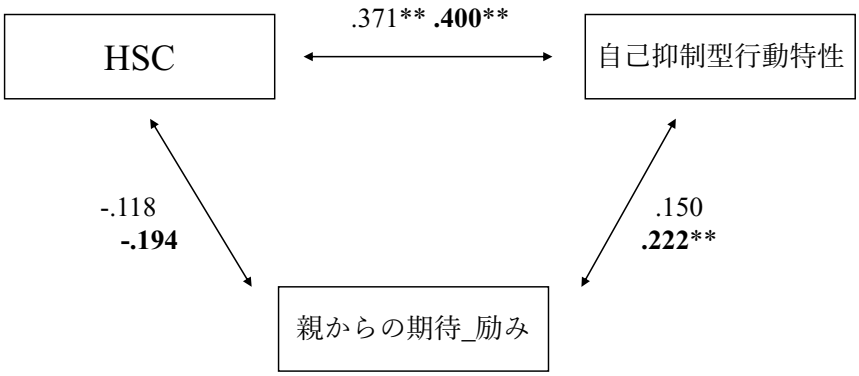

Figure 2. HSC，自己抑制型行動特性，励みの関係。
※数字は相関係数，**偏相関係数**の順序で示す。

$p<.001$）。以上より，自己抑制型行動特性得点と励み得点に見られなかった単相関が，HSC得点を統制することで正の相関が見られることが明らかとなった（Figure 2）。

HSC，重荷，励み，自己抑制型行動特性の関連

HSC，重荷，励み，自己抑制型行動特性の関連を明らかにするために，HSC，重荷，励みを独立変数，自己抑制型行動特性を従属変数とする重回帰分析を行った（Table 4）。その結果，HSC得点，重荷得点，励み得点のすべてが自己抑制型行動特性にプラスの影響を与えていることが明らかとなった（$\beta=.298$，$p<.001$，$\beta=.248$，$p<.05$，$\beta=.301$，$p<.001$）。

考　　察

本研究では，HSCは親からの期待に敏感に反応して自己抑制型行動特性を身につけやすいのかを明らかにすることを目的として，中学生に質問紙調査を行った。

重荷得点と自己抑制型行動特性得点の間に見られた正の単相関が，HSC得点を統制すると無相関になったこと，および，HSC得点・重荷得点が自己抑制型行動特性得点にプラスの影響を与えていることより，HSCは親の期待を重荷として敏感に察知し，自己抑制型行動特性を身に付けやすいことが示唆された。励み得点が自己抑制型行動特性得点にプラスの影響を与えている一方で，励み得点と自己抑制型行動特性得点に見られなかった単相関が，HSC得点を統制することで正の相関が見られたことより，HSCは期待を励みとして敏感に察知し，自己抑制型行動特性を身に付けるという仮説は支持されなかった。以上より，親からの期待に敏感に反応して自己抑制型行動特性を身につけやすいという仮説は部分的に支持された。

HSC，重荷，自己抑制型行動特性の関連

重荷得点と自己抑制型行動特性得点に見られた正の相関がHSC得点を統制すると見られなくなったことより，期待を重荷と感じることで自己抑制型行動特性を身に付けやすいことは，HSC特有の性質であることが分かった。春日他（2014）では，期待に対する否定的反応は自己抑制型行動特性と正の相関があった。しかし，本研究において，気質的な敏感さを考慮すると期待に対する否定的反応（期待を重荷と感じること）は自己抑制型行動特性と正の相関がなくなった。以上より，春日他（2014）が指摘しているように，親からの期待に関する研究においては，気質の影響を考慮するべきであることが明らかとなった。

本研究における重荷得点は，「期待されることに疲れた」や「結果を出せなかったらどうしようと不安だった」，「期待されることを嫌だと感じた」などの項目を含んでいる。つまり，HSCにとって親からの期待は，疲労，不安，嫌悪を抱かせるものである。HSCはこれらの自己の感情を知覚する感受性が高い。つまり，自己の感情に対するメタ認知能力が高いと言える。メタ認知とは，認知についての認知である。メタ認知の神経学的基盤として，実行機能や自己制御機能を持つとされる前頭前皮質が考えられているが，それだけでなく，上側頭溝や扁桃体も想定されている（藤谷，2011）。SPSは，神経学的領域において環境感受性と呼ばれ，環境感受性が高い人は，扁桃体が敏感であることが示されている（Acevedo et al.，2018）。これらのことより，HSCは生得的に扁桃体の敏感さを持っており，メタ認知が発達している可能性も考えられる。さらに扁桃体は，脅威や先行きの不透明さを特に察知する働きを持つ。そのため，HSCにとって期待が脅威刺激として感じられている場合，過度に反応し，期待によって生起する疲労や不安，嫌悪から自己を防衛するために，自己抑制という方略を用いた可能性も考えられる。

ここまで，自己の感情に対するメタ認知について，述べてきた。自己の行動に対するメタ認知と類似する心理学用語にセルフモニタリングが挙げられる。セルフモニタリングとは，状況の手がかりから，社会的な適切さを判断し，それに則って行動を監視（monitor）し，制御することと定義される（Snyder，1974）。伊藤・根建（2001，p.34）では，「一定の基準（社会的な適切さなど）に，

自分の表出した行動がどの程度合致しているのかを正確に把握する能力」とされている。セルフモニタリング傾向が高い者は，直面する他者や環境に応じて，その状況で要求される理想的人間のプロトタイプを見極めようとする（Snyder，1979）。本研究において，要求される理想的人間は親からの期待に応えられている自己と考えられる。HSCは期待に応えている理想的な人間になれるように，自己の行動を決定しようとするために，自己の感情に従った行動を表出するというよりは，自己の感情を抑制し，理想的な人間になれるような行動を表出するのだと考えられる。秋山・竹村（1994）では，不快感情の喚起が意思決定における理性的で精緻的な思考を妨げ，反対にヒューリスティックな思考を優先させることが明らかとなった。つまり，不快感情を抱くと，客観的な情報に基づく決定よりも，個人の経験則に基づく決定が優先されるということである。HSCが親から期待をされた時に感じる疲労・不安・嫌悪は不快感情である。また，HSCは他者の表情を見ただけで相手の考えていることが分かる（串崎，2019）など，他者に対する感受性や共感性が高い特性を持つ。HSCは自分が敏感に反応したことに対して，相手がネガティブな反応をみせた経験があり，その結果，客観的にポジティブな期待に対してもネガティブな期待を想起するなど自動思考に歪みが生じた可能性もある。これらのことから，HSCは不快感情を抱くと，経験則的に自己抑制をした行動をする可能性がある。そのため，期待をされると自動的に重荷と感じ，自責的に考えることが日常的になっている可能性が考えられる。

HSC，励み，自己抑制型行動特性の関連

相関分析より，励みと自己抑制型行動特性には有意な相関がみられなかった。HSCを統制した偏相関分析を参照すると，励みと自己抑制型行動特性に正の相関が見られた。以上より，HSCは期待を励みと捉えると自己抑制しづらいことが示唆された。しかし，相関分析より，HSCは自己抑制をしやすいことは明らかである。また，HSCは重荷を感じやすいことも明らかである。つまり，励みと自己抑制型行動特性を想定された正の相関を打ち消すほどにHSC特性が強力なものであるというよりは，HSCは客観的に励みと受け取れる期待に対しても，重荷と受け取ることが多く，励みとして受け取ることが少なかったと考えられる。HSCは，その特性によって，養育者はさまざまな育てにくさを感じる（Aron，2002 明橋訳，2015）。育てにくさを養育者が抱えきれなかった場合，子は安定したアタッチメントを築きにくい。不安定型のアタッチメントは情動調整の未熟さや不快情動の多さを抱える傾向があるため（Kerns，Abraham，Schlegelmilch，& Morgan，2007），親からの期待に対して，重荷という不快感情を喚起しやすい可能性がある。以上のことより，HSCは期待を励みとして受け取りづらく，重荷として受け取りやすい可能性がある。HSCに対する期待のかけ方について，HSCの歪んだ認知の側面に配慮する必要がある。

不登校に関する支援

冒頭で述べたように，不登校生徒は増加傾向である（文部科学省，2021）。不登校生徒には，しばしば感覚過敏が見受けられ（岡田，2017），不登校の要因の一つとして敏感さが注目されている。HSCにとって学校は刺激が多すぎる難所であり，適応が難しい場所とも言える（Aron，2002 明橋訳，2015）。自他の感情や物音に敏感であるHSCは，それらの刺激に敏感に反応しストレスを感じるために不登校傾向が高い（鈴木他，2019）。HSCは学校で期待をかけられる場面において，ほんの些細な表情や仕草からも期待を感じ取り，さらに，それらを深く処理するだろう。以上のことに本研究の結果を合わせて考えると，感じ取った些細な刺激から期待を処理する際に，客観的に励みというプラスの処理ができる期待であっても，重荷というマイナスの処理をすると考えられる。その結果，自己の考えと認知した期待の内容に違いを感じ，期待に沿った適応をするために自己を抑制した行動をする可能性が高い。これらの負のサイクルを断ち切るために，教員にできることとして，自己開示を提案する。自己開示とは，他者に対して，自分自身に関する真の情報を言語的に伝達することである。伊藤・宇佐美（2017）は，

学校での問題について焦点を問題に絞るのではなく，行動の文脈として，学級風土に焦点を広げる必要性を指摘している。教員が生徒に対して，自己の素直な気持ちや考えを伝えることで，学級の雰囲気は開かれたものになり，HSCは考えを伝えやすくなるだろう。さらに，教員の自己開示の仕方は，自分の素直な気持ちや考えを他者に伝える手本となりえる。自己開示を受けた量（被自己開示量）は学校適応感と正の相関がある（岡田・中森・中谷，2005）。また，返報性の理論より，自己開示を受けた者は自己開示をしやすいと考えられる。以上より，HSCは自己開示を受けることによって，自分の感情や考えを他者に伝えやすくなり，学校適応感が増すと考えられる。

これらのことより，期待に関する刺激（直接的な言葉や視線，表情など）を深く処理したとしても，マイナスに考え，自己抑制をした行動を取ることにストップをかけられるように，日常生活において，被自己開示量を増やし，自己の考えを伝えやすい環境を作ることが，HSCが不登校になる前にできる支援である。

差次感受性モデル

近年，SPSに関する研究において，SPSの高い者は良い環境からは良い影響を受けやすく，悪い環境からは悪い影響を受けやすいという差次感受性モデルが精緻化されている（Belsky，1997；岐部・平野，2019）。本研究により，HSCは重荷の刺激を受けると自己抑制型行動特性を促進させるということが示唆され，悪い刺激を受けると悪い影響を受けるという部分は合致している。さらに，励みの刺激を受けると自己抑制型行動特性を促進させないということも示唆され，良い刺激を受けると良い影響を受けるという部分も合致している。しかし，HSCが重荷として期待を受け取りやすいことを考慮すると，期待を励みと認識できていない可能性がある。以上より，本研究の結果は差次感受性モデルに合致した結果ではあったが，HSCの期待の認知の仕方について，さらなる研究の必要があるだろう。

今後の課題

本研究は親の期待に着目し，HSCが生きやすい環境への示唆を得ることが目的であった。HSCは親が行う期待をポジティブに捉えることが困難であり，期待をかけられる場面は適応が難しい環境であるというややネガティブな結果が示された。しかし，HSPを唱えたAron（1997）は，SPSの高い者は感覚世界を深く豊かに経験することができるというポジティブな特性であることに着目し，特に美的感受性にポジティブな特性を見出していた。今後，敏感さを，刺激からの影響の受けやすさ（易興奮性）やわずかな刺激への高い反応性（低感覚閾）というネガティブな側面に注目して研究を行うことよりも，精神生活の豊かさ（美的感受性）に着目した感情焦点型コーピングなどの研究をしていくことが求められる。

付　　記

本論文は，2021年度に愛知淑徳大学心理学部に提出した卒業論文の一部を加筆・修正したものである。

引用文献

Acevedo, B., & Aron, E., & Pospos. S., & Jessen, D.（2018）. The functional highy sensitive brain: a review of the brain circuits underlying sensory processing sensitivity and seemingly related disorders. Philos Trans R Soc B Biol Sci. Retrieved from https://doi.org/10.1098/rstb.2017.0161（2022年10月17日）

秋山 学・竹村 和久（1994）. 深い感情と関与が意思決定過程に及ぼす影響 実験社会心理学研究，*34,* 58-68.

Aron, E. N.（1997）. *The Highly Sensitive Person : How to Thrive When the World Overwhelms You.* New York: Broadway Books.
（アーロン，E. N. 冨田 香里（訳）（2000）. 些細なことにもすぐに「動揺」してしまうあ

なたへ。講談社）

Aron, E. N.（2002）. The Highly Sensitive Child: Helping Our Children Thrive When the World Overwhelms Them. UK: Harmony.
（アーロン, E. N. 明橋 大二（訳）（2015）. ひといちばい敏感な子――子どもたちは，パレットに並んだ絵具のように，さまざまな個性を持っている―― 1万年堂出版）

赤城 知里・中村 真理（2017）. 感覚処理感受性とソーシャルスキル，精神的回復力の関連性の検討 東京成徳大学臨床心理学研究, *17,* 59-67.

Belsky, J.（1997）. Variation in Susceptibility to Environmental Influence: An Evolutionary Argument. *Psychological Inquiry, 8,* 182-186.

岐部 智恵子・平野 真理（2019）. 日本語版青年前期用敏感尺度（HSCS-A）の作成 パーソナリティ研究, *28,* 108-118.

平野 真理（2012）. 心理的敏感さに対するレジリエンスの緩衝効果の検討 ――もともとの「弱さ」を後天的に補えるか―― 教育心理学研究, *60,* 343-354.

藤谷 智子（2011）. 幼児期におけるメタ認知の発達と支援 武庫川女子大紀要, *59,* 31-42.

石津 憲一郎・安保 英勇（2008）. 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, *56,* 23-31.

伊藤 亜矢子・宇佐美 慧（2017）. 新版中学生用学級風土尺度（Classroom Climate Inventory; CCI）の作成 教育心理学研究, *65,* 91-105.

伊藤 義徳・根建 金男（2001）. ネガティブ感情の喚起がセルフモニタリングの能力に及ぼす影響 行動療法研究, *27,* 33-46.

柏木 恵子（1990）. 環境しての親の期待 ミネルヴァ書房.

春日 秀朗・宇都宮 博（2011）. 親からの期待が大学生の自尊感情に与える影響 ――子どもの期待に対する反応様式に注目して―― 立命館人間科学研究, *22,* 45-55.

春日 秀朗・宇都宮 博・サトウ タツヤ（2014）. 親の期待認知が大学生の自己制御型行動特性および生活満足感へ与える影響：期待に対する反応様式に注目して 発達心理学研究, *25,* 121-132.

Kerns, K. A., Abraham, M. M., Schlegelmilch, A. & Morgan, T. A.（2007）. Mother-child attachment in later middle childhood: Assessment approaches and associations with mood and emotion regulation. *Attachment & Human Development, 9,* 33-53.

菊池 由莉・岡本 祐子（2008）. 大学生の「よい子」傾向と心理社会的発達段階の関連 広島大学心理学研究, *8,* 99-106.

子安 増生・郷式 徹（2007）. 大学生における両親の期待度とその実現度の認知の比較 京都大学大学院教育学研究科紀要, *53,* 1-12.

串崎 真志（2018）. 高い敏感性をもつ子ども（Highly Sensitive Child）の理解 関西大学人権問題研究室紀要, *76,* 27-55.

串崎 真志（2019）. 感覚処理感受性が共感の正確性と動作の模倣に及ぼす効果 関西大学心理学研究, *10,* 1-9.

水野 里恵（2010）. 子どもとその母親の対人場面での自己制御行動 ――幼児期における母親の発達期待や子どもの気質を文字得た縦断データの検討―― 日本心理学会大会発表論文集, *74,* 1026.

文部科学省 初等中等教育局児童生徒課（2021）. 令和2年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査結果の概要 文部科学省 Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf（2021年12月6日）

宗像 恒次（1997）. 本当の自分を見つける本――イイ子症候群からの脱却―― 京都：PHP研究所

岡田 尊司（2017）. 過敏で傷つきやすい人たち ―HSPの真実と克服への道― 幻冬舎

岡田 涼・中森 仁美・中谷 素之（2005）. 高校生

の自己開示・被開示が学校適応感に及ぼす影響――公的自己意識との関連から―― 学校カウンセリング研究, *7,* 23-30.

Snyder, M. (1974). Self-monitoring of expressive behaviour. *Journal of Personality and Social Psychology, 30,* 526-537.

Snyder, M. (1979). Self-Monitoring Processes. *Advances in Experimental Social Psychology, 12,* 85-128.

苑田 純子 (2014). Highly Sensitive Personの気質特性の理解と気質による問題点への対処法 武蔵野大学紀要, 人間学研究論集, *4,* 79-89.

鈴木 仁美・菊島 勝也 (2019). 不登校傾向を示す大学生の友人関係と感覚処理感受性の検討, 日本心理学研究, *83,* 341.

髙橋 亜希 (2016). Highly Sensitivity Person Scale 日本版 (HSPS-J19) の作成 感情心理学研究, *23,* 68-77.

上田 敏子・窪田 辰政・橋本 佐由理・宗像 恒次 (2012). 大学生におけるストレス耐性と心理特性との関連 筑波大学体育科学系紀要, *35,* 203-207.

渡部 雪子・新井 邦二郎・濱口 佳和 (2012). 中学生における親の期待の受け止め方と適応との関連, 教育心理学研究, *60,* 15-27.

Effects of sensory processing sensitivity on self-inhibited behavioral traits: Targeting junior high school students who are easily influenced by parental expectations

Momoka Suzuki

Abstract:

In this study, I examined the influence of sensory processing sensitivity on self-inhibiting behavioral traits in junior high school students, who are easily influenced by parental expectations. Junior high school students with high sensory processing sensitivity were defined as Highly Sensitive Children (HSC), and it was hypothesized that HSC would be more sensitive to parental expectations and more likely to develop self-inhibiting behavioral traits. Factor analysis revealed that expectations consisted of burdens and encouragement. Partial correlation analysis revealed that the positive single correlation between Burden and self-inhibiting behavioral traits scores became uncorrelated when HSC scores were controlled, suggesting that HSC are sensitive to parental expectations as burdens and are likely to acquire self-inhibiting behavioral traits. On the other hand, a positive correlation was observed when HSC scores were controlled for the single correlation that had not been observed between the encouragement score and the self-inhibiting behavioral traits score, suggesting that the hypothesis that HSC are sensitive to expectations as encouragement and acquire self-inhibiting behavioral traits was not supported. Thus, the hypothesis was partially supported. Based on the results of this study, self-monitoring and school support for HSC were discussed.

Key words: sensory processing sensitivity, self-inhibiting behavioral traits, parental expectations, junior high school students